

エレン・グラスゴーと「女性神話」

——『彼らは愚行に屈した』をめぐって——

相 本 資 子

『彼らは愚行に屈した』(*They Stooped to Folly*, 1929) は、リッチモンドをモデルにしたクィーンバローという架空の都市の生活を描いた小説で、『ロマンティックな喜劇役者たち』(*The Romantic Comedians*, 1926) や『保護された生活』(*The Sheltered Life*, 1932) と共に、クィーンバロー3部作と呼ばれている。クィーンバロー3部作は、エレン・グラスゴー (Ellen Glasgow) の数多くの小説の中では、『ヴァージニア』(*Virginia*, 1913) や『不毛の土地』(*Barren Ground*, 1925) と並んで、彼女の代表作という評価を受けているが、『ロマンティックな喜劇役者たち』と『保護された生活』が文学史にもその題名が言及され、多くの読者に読まれているのに対し、これから取り上げる『彼らは愚行に屈した』は、知名度も低く、批評家の評価も3作のうちで一番劣っている。

この小説の中心となる人物は、ヴァージニアス・リトルページ (Virginius Littlepage) と妻のヴィクトリア (Victoria) で、赤十字のメンバーとして第一次世界大戦に参加していた娘のメアリー・ヴィクトリア (Mary Victoria) は、何年かぶりにクィーンバローへ帰ってきたときには、ミリー (Milly) という女性の元の恋人マーティン (Martin) と結婚していることが判明する。この結婚は、両親に大きな衝撃を与えるが、結局それは失敗におわることとなり、マーティンが再びヨーロッパへ去ったあと、メアリーはおなかの子を産み育てる決心をするところで小説は終わっている。同じように、第一次世界大戦後の混乱期

を描いていても、『ロマンティックな喜劇役者たち』のように古い世代と新しい世代の食い違いや風俗の対立葛藤を詳しく描いていないし、『保護された生活』のように、悲劇的な結末を迎えるわけでもなく、『彼らは愚行に屈した』は動きが少ない単調な小説で、風俗小説としても成功しているとは言えない⁽⁴⁾。

にもかかわらず、この作品は、グラスゴーの代表作といわれ、グラスゴー自身も彼女の好きな小説、ベスト6の中に数えあげているのは、なぜだろうか。グラスゴーは、この小説で「男性によって認められただけでなく発明された」「女性神話」(the myth of woman)に深く係わっており、特に「墮落した女性の神話」(the myth of the ruined woman)を取り上げたかった、と述べている⁽⁵⁾。この作者の発言に加えて、ブレア・ラウズは「男性によって押し付けられた女性神話」に言及し、リンダ・ワグナーも、「女性に関する最も一般的な神話の探求」という表現を用いている⁽⁶⁾。どうやらこの作品の主題は、「女性神話」との係わりをぬきにしては考えられないように思われるが、「女性神話」を語るためには、まず「南部神話」について考えておかねばならない。

J. H. フランクリンによると、「夢の中のユートピアとしての新世界のヴィジョン」や「完全な社会」を、南北戦争以前の南部社会に見つけた南部人は、「彼らが発見したものの熱烈な擁護者」となり、その社会が「変化」することを好まなかった⁽⁴⁾。完全なユートピアを「古い南部」に発見した南部人は、理想の女性像をも、当然「古い南部」に探し求める。そこでは「名誉」「美德」「騎士道精神」「厳格な行動の規範」が重要視され、特に女性は、厳格な礼儀正しさや、丁重さ、純潔さが要求される。キャサリン・クリントンは、理想化された南部貴婦人は、「ユリの花のようにデリケートで、鳩のように汚れがなく、アラバスターのように白くなめらかで、磁器のように壊れやすいが、とりわけ吹き寄せられた雪のように純潔」でなければならなかった、と書いている⁽⁵⁾。南部貴婦人がこれらの条件を満たすことができれば、白人男性は南部の文明の優越性を誇ることができたのである。A. F. スコットは、南部貴婦人は「従順

な妻として表現され、その存在理由は、夫を愛し、敬い、従い、ときには楽しませることであり、彼の子供を育て、家を切盛りすることだ」と述べ、信心深く、献身的な彼女は「完全さ」と「服従」の理想であると論じていた⁶⁾。いずれにしても、「南部貴婦人」は、南部貴族である白人男性が支配する「古い南部」の象徴であり、「女性神話」は、「南部神話」と密接な関係を持っていることになる。

『彼らは愚行に屈した』の時代設定は、第一次世界大戦後の1923年から1924年ということになっているが、「変化」を嫌う南部社会であるクィーンバローにはいぜんとして「騎士道」「義務」「つつましさ」「道徳性」「美德」などの「古い南部」で理想とされていた価値が支配している。そして、これらの理想を体現している人物が、ヴィクトリアであり、完璧な妻であり母である彼女は、「楽しみではなく、義務が人生の主たる目的である」⁷⁾と考えている、典型的な「南部貴婦人」である。夫のヴァージニアスを「幸せにした」(p. 126) ことに満足し、「ヴァージニアスと結婚と人間一般がすべて彼女の望みどおりのものに他ならない」(p. 63) と思いこんでいる。幸せで完璧な社会が「変化」するのを嫌うヴィクトリアは、自分が不治の病にかかっていることを最後まで家族に隠しとすすのであり、子供時代のことをしばしば思い出すのも、「変化」のなかった古き良き昔に戻りたい願望の表れと思われる。

ヴィクトリアの娘メアリー・ヴィクトリアは、典型的な「南部貴婦人」のヴィクトリアによって、美德の固まりのような女性に育てられている。正しいことをするのが自分の使命と考えている理想主義者のメアリーは、「全世界を自分の力の及ぶ範囲で完全に支配すること」(p. 114) を望んでいて、戦争中は、「救いの力」(p. 115) と呼ばれるほどであった。マーティンと結婚したのも、病院で死にかけていた彼を救うためで、帰国後もメアリーのエネルギーは、彼を理想的な夫に仕立てることに注がれる。「彼を完璧にするのが義務である」(p. 80) と考えているメアリーは、ヴィクトリアと同じように、戦前の「古い

南部」の伝統的な規準を「変化」させることなく守っている、「南部女性」の一人であると言えるだろう。

この小説には、もう一人の「南部女性」として、ヴィクトリアの友人のルーザ (Louisa) が登場する。彼女は未婚だが、リトルペイジ家の人々が「困ったときに頼りかかる岩」(p. 304) のような存在となっている。ルーザは、社会改革を論じる演説家として活躍し、戦後の新しい女性といった印象をあたえるが、同時にまた、グラスゴーは彼女の「顔立ちの美しさ」や「控え目なこと」や「純潔さ」を強調することを忘れていない。心ひそかにヴァージニアスを愛しているながら、決して誰にもしゃべることなく、相手に気付かせないようにさえするつまましい女性として描かれているルーザは、理想化された「南部女性」の特徴を残していると考えていい。こうして、ルーザを含めた三人の「南部女性」は、「古い南部」の価値観をそのまま受け継いでいるように見えるが、彼らもまた第一次世界大戦後の「変化」を経験することを余儀なくされていることが次第に明らかになってくる。

たとえばヴィクトリアは、心臓発作を起こしたあと、今までの自分の生き方に疑問を抱き、何か大切なことをつかみそこねているのではないかと思いはじめる。彼女が今まで大切にしてきた自己犠牲や義務は、「重要でない理想のためになされた高価な犠牲」であり、「かつて義務と呼んでいたものの残骸」(p. 143) のように思えてくる。「南部女性」のイメージに自分を合わせさえすれば、完璧に幸せな世界が実現できるはずであったのに、病気という「変化」が入りこんできたとき、彼女の「古い南部」は失われ、「私は本当の私ではない。私の中身は空っぽだ」(p. 226) とヴィクトリアは叫ぶのである。しかし、大切にしてきた価値観に疑問を持ったものの、ヴィクトリアには他にになすすべもなく、あいかわらず、夫や子供や失望しているミリーとその母親の幸せのことなどを考え続ける。そして幸せな思い出を残したいというだけの理由で、自分の病気を隠して元気なふりをし続けた彼女は、結局一人で死んでしまう。完全と

思われた「南部女性」の「古い南部」の世界も、病気や死といった「変化」には打ち勝てなかったことを示しているという意味で、ヴィクトリアの死はきわめて象徴的であると考えられる。

もう一人の「南部女性」である、メアリーは、彼女の「善をもたらす力」によって、マーティンを理想的な夫に仕立てあげるはずであった。「彼は私の理想に合致するように精いっぱい努力している」(p.150)とメアリーは満足げに語っているが、自分には合わない「わざとらしい生活」(p.269)を強いられた結果、マーティンは精神的におかしくなり、かえって自分を破滅させてしまう。マーティンは、メアリーのもつ「南部女性」としての義務感や理想主義の犠牲になったと言えるだろう。この犠牲者としてのマーティンが彼女の叔母のアガサ (Aunt Agatha) によって「きつね」のイメージで捉えられているのは、きつね狩りのきつねのようにメアリーによって一方的に破滅させられたことを物語っている。完全で幸せな世界を作り出すはずであった「南部女性」の美德は、ヴァージニアスが指摘しているように、「道徳的に有害な作用」(p.233)をもたらしたのである。さらにマーティンに去られたメアリーは、気も狂わんばかりに悲嘆にくれるが、やがて子供を生むことに義務感を見だし、「愛を失ったとしても、私の子供の生活の中で善をもたらす力となることができる」(p.304)と言って元気をとりもどす。この結末は、「南部女性」の美德には破壊的な要素が含まれているだけでなく、「南部女性」として育てられ生きてきたメアリーには、妻になるか母になるかのいずれかの道しか残されていないという事実を明らかにしている。そして、その事実の不毛性に今だに目覚めることのないメアリーの姿を、グラスゴーはアイロニカルに描き出しているのである。

三人の「南部女性」の中では、ルーザが、一番幸せな女性だということができる。ヴァージニアスをひそかに愛して独身をとおしてきた彼女は、妻にも母にもなることを許されていないので、正確には「南部女性」と呼べないのかもしれない。にもかかわらず、ルーザが他の二人の女性よりも幸せなのはな

ぜだろうか。ひとつには、リンダ・ワグナーやバープロ・エクマンが指摘しているように、グラスゴーが自分と同じような独身の女性を、妻や母となる女性よりも好ましいと思っていたことが挙げられるだろう⁶⁾。しかし、なによりも、ルイーザが「冷静で沈着で独立した」女性として世の中を眺め、「過去の謙虚さは偽りの神であって本当の神でない」ことを知っていたためであると考えられる。彼女は、「偉大なヴィクトリア朝の伝統の虚偽や苦悩やはかない希望や無益な努力や見せかけや虚勢や作りものの魅力やむなししいポーズに値するものは何一つとしてなかった」(p. 287) と考え、「古い南部」の価値観だけでは女性には幸せになれないことを感じとっている。ルイーザは、「古い南部」を「変化」から守ろうとする試みが「無益な努力」であることを知っている、目覚めた「南部女性」であるがゆえに、ヴィクトリアやメアリーのような悲劇的人生を歩むことがないのである。

この小説には、オリヴァー・ゴールドスミスの小説からとられたタイトルが示しているように⁷⁾、三人の「墮落した女性」が登場するが、これらの「墮落した女性」の生きざまを考えることで、「南部神話」の本質がさらに明らかにされるように思われる。ヴァージニアスが「墮落していないすべての女性を敬うという厳しい伝統に訓練された」(p. 12) のように、道徳的な「古い南部」の世界では、美徳の固まりのような「南部女性」以外の女性は受け入れられず、「墮落した女性」はすべて排除される運命にあった。キャサリン・クリントンは、「墮落した女性」について、「女性の墮落は、その女性を償うことのできない不名誉と取り返しのできない後悔にあふれた地点へ突き落とした。道徳が南部女性を牢獄に閉じ込めていたとすれば、こうした墮落した女性はずっと低いところにある土牢へと追いやられ、それを開ける鍵は社会が投げ捨てていた」と説明している。「古い南部」を支配する厳しい道徳によって、女性や子供は縛られていたが、白人男性にだけはダブル・スタンダードが許され、白人男性の犯す不義は認められていた。南部の紳士たちは、「南部女性」という理想的

女性像を作り上げた一方で、自分たちの勝手に女性を誘惑し、「墮落した女性」を作りだしたことになる。しかも、「墮落した女性」のレッテルをはられた女性たちは、二度とそのレッテルをはがすことができず、一生、社会的尊敬を得られずに暮らしていかなければならない。クリントンは、「女性の名誉を守るために抜かれたと同じ剣が、まったく同じようにやすやすと不名誉な女性の非難に向けられた」と説明している⁴⁴。

この作品には三つの異なった世代に属する三人の「墮落した女性」が登場する。まず、最年長のアガサは1870年代の「墮落した女性」で、「誘惑のエチケット」(p. 73)に従って誘惑者の名前も明かさず40年以上も三階の奥の寝室に閉じこもったきりであった。「生きざまの手本」(p. 73)と言われてきた彼女の生き方は、「終身刑」とか「カタストロフィー」(p. 289)とかいった言葉でグラスゴーが説明しているように、南部紳士たちが「墮落した女性」に求めたものであった。ところが、戦争中に負傷兵たちのパジャマを作る仕事をしてから、アガサの生き方に変化がみられ、夜遅くまで出歩いたり、食堂で時間を過ごしたり、扇情的なタイトルの映画を見に行ったりするようになる。アガサは今まで自分を縛ってきた厳しい道徳や伝統に対して疑問をもちはじめ、50年早く生まれたために多くの楽しみを失ったことを後悔するのである。

1890年代の「墮落した女性」は、エイミー・ダリンプル (Amy Dalrymple) である。彼女は、最初の夫とは離婚し、恋人には捨てられた「墮落した女性」の一人だが、アガサのように、人目を避けてひきこもった暮しをしたりはしない。誘惑者の名前を隠したりもせず、五年も経たないうちに再婚したり、戦争中はヨーロッパへ渡って大活躍をしたりして、あたかも「墮落した女性」としての過去が忘れ去られたかのようであった。しかし、そのエイミーも、ウィクトリアとメアリーが彼女に対して嫌悪を示すことからわかるように、まだ「古い南部」の美徳が支配するクィーンズバローには受け入れられない。「南部女性」になりそこねたエイミーは、愛に頼るしか道がなく、その場限りの恋人を

つくって生きていくほかはない。「もう一度人生をやり直すことができれば、愛にすべてを賭けるような真似はしないでしょくに」(p. 89)と語っていることから明らかのように、彼女はけっして幸せではないのである。

もっとも若く、もっとも幸せな「墮落した女性」が1920年代のミリーである。恋人のマーティンがメアリーと結婚したために、ミリーも「墮落した女性」の仲間入りをしたのであるが、「哀れなアガサのように涙をながすでもなく、つかみ所のないダリンプル夫人のように平然とした態度でもなく、まったく個人的な事柄であるかのように、きわめて自然に」(p. 190)振舞っていると描写され、自分のことを「墮落した女性」だとも思っていない。「美德」を失ったことではなく「恋人」を失ったことを嘆くだけで、人生をもう一度やり直せると信じている。「私には幸せになる権利がある」と繰り返して主張し、小説の終わりでは、「私は幸せだわ。去年の私のような不幸を経験したことのない人は、こんなにも幸せになることはできないでしょう」(p. 303)と断言するにいたるのである。

ミリーにとっては、「古い南部」の美德は「うそ」であり「見せかけ」にすぎず、ヴィクトリアやメアリーのような完全な「南部女性」になることも拒否し、アガサのような「墮落した女性」としての制限された生き方をも拒否したミリーは、「信仰」でもなく「愛」でもなく、「愛するに値するなにか」(p. 301)を求めている。この、一見積極的で肯定的な生き方は、パープロ・エクマンが述べているように、『この世の中で』(*In This Our Life*, 1941)のロイ(Roy)に引き継がれ、そうした生き方ができるようになった彼女たちは幸せをつかむことに成功したと考えられている。しかしながら、グラスゴーは、ロイが最後にみつけた「愛するに値するなにか」は、結局「古い南部」の農業の世界であった、と結論していたことを考えれば、「古い南部」の価値観をすてたミリーが、果して本当に「愛するに値するなにか」を見つけて幸せになれるかどうかは疑わしい⁶⁰。

「墮落した女性」は、すでに触れたように、南部人の理想とする「古い南部」の世界においては、罪を一身に背負い、不幸な一生を過ごす運命にあった。「南部女性」の生きざまだけでなく、「墮落した女性」のそれも一緒に考えあわせると、「古い南部」という完全な世界をひたすら追求する理想主義的な南部人の裏にかくされている残酷さを、浮き彫りにすることができるだろう。「南部女性」も「墮落した女性」もともに南部紳士の作りだした理想の犠牲者となったのである。グラスゴーは、この小説で、三人の「墮落した女性」を世代別に描いているが、戦争をきっかけとして、彼女たちは、犠牲者としての人生をやめて自分の人生を求め始める。このことは、「墮落した女性」に厳しい道徳的規制を課していた「古い南部」という世界が、崩れ始めていることを示している。「南部女性」も「墮落した女性」も、南部紳士が作りだした女性の神話だが、「南部女性」のヴィクトリアやメアリーが歩んだ人生は、「古い南部」の価値観のもつ残酷さを明らかにしているし、三人の「墮落した女性」の生きざまは、「古い南部」の価値観の犠牲者が自分たちの人生を探しだしたことを示している。いずれの女性たちの生き方も、作られたイメージが現実とかけはなれていることを明らかにしているといえる。J. H. フランクリンが、二十世紀に入ると、「至るところに変化が現れ、それに対する抵抗はますます難しくなった」と言っているように⁸⁹、グラスゴーは「女性神話」の「変化」を詳しく描き出すことによって、第一次世界大戦という大きな「変化」の後までも、「古い南部」という理想から「変化」を排除しようとするのは、とうてい不可能であることを示しているのだ。

以上のように、グラスゴーは、二組の対照的な女性たちを描くことで、「女性に支配された社会」であるクィーンバローの戦後の混乱を映し出しているが、この小説の本当の主人公は、女性たちではなく、一人の男性、ヴァージニア・リトルページであると言えるだろう。『彼らは愚行に屈した』がクィーンバロー3部作の一つであることは先に述べたが、他の二作の主人公が年若い

た男性であることから考えても、やはりこの小説における老男性ヴァージニアスは、重要な役割を担っていると考えられる。何人かの批評家が、ヴァージニアスは「物語と読者の間の解説者」で「中心的視点」であると述べているように⁶⁹、ヴァージニアスは無視することのできない人物のように思われる。

ヴァージニアスは、弁護士として成功をおさめ、夫としても父親としても非の打ちどころがない。彼はまた、「古い南部」の美德を大切にす理想主義者で、騎士道、義務、慎み深さ、道徳、古い習慣などを重要視している。「古い南部」を「変化」から守るという理想に燃えた南部人としての彼は、「南部女性」や「墮落した女性」の神話を作りだした南部紳士の子孫にほかならない。それゆえに、ヴィクトリアを完全に理想的な妻とみなし、メアリーを「私の人生のロマンス」(p. 43)として可愛がるのである。特にメアリーについては、七才のときの彼女のイメージをいまでも持ち続け、いつまでも無垢な子供だと思いつこんでいる。ところが、第一次世界大戦後、ヴァージニアスは、今までの自分の生活に満足できなくなる。自分が信じて守りぬいてきた、古い価値観の支配する世界に疑問を持ち始めるのである。「過去がどこか間違っていたなどということが有り得るだろうか。監督派教会にさえも致命的な欠陥があったのだろうか。純粋な女性という理想にも腐敗の虫が取り付いていたのだろうか」(p. 18)という問いをヴァージニアスは投げかけている。そして、彼は「南部女性」を理想の女性とあがめていながら、「墮落した女性」であるダリンブル夫人にひかれていく自分に気がつく。このことは、ヴァージニアスが今まで抱き続けてきた「古い南部」の価値観が揺らぎ出していることを示していると考えてよい。

ヴァージニアスのこの不安定さは、彼のまわりの「南部女性」や「墮落した女性」の生き方を彼が傍観者として眺めるにつれて、ますます浮き彫りにされてくる。彼と同じ価値観を分かち合っていたヴィクトリアも、病気や死といった「変化」には打ち勝てなかった。しかも彼はヴィクトリアを幸せにしたとい

う絶対的自信をもっていたのだが、実はそうではなかったという発見は、「古い南部」の価値観の無意味さをアイロニカルに浮かび上がらせる。また、彼が無垢な子供のイメージで捉えていたメアリーは、マーティンを救うために彼と結婚し、かえって不幸になってしまう。さらに、マーティンの行方を捜すことをヨーロッパにいるメアリーに頼んだのは、ミリーを助けるために騎士道精神を発揮したヴァージニアス自身であり、そのためにメアリーとマーティンの結婚という皮肉な結果を招いたことは、ヴァージニアスに非常なショックを与える。こうした一連の事件がきっかけとなって、彼は理想としていた「古い南部」の世界に対する疑問を深め、それは理想の世界ではなく、実は「偽善の制度」(p. 244)ではなかったらうかと思うのである。また一方、「墮落した女性」たちが犠牲者としての強いられた生活を捨てて、挑戦的な態度を見せはじめたとき、ヴァージニアスは、「墮落した女性」の神話に隠された残酷さに気付き、「墮落した女性」は「男性の発明」(p. 18)であったかもしれない、と思い始める。彼は理想の追求という自分の行偽が犯した間違いに目覚めるのである。

ヴァージニアスは、彼が依存してきた「古い南部」の価値観が「南部女性」と「墮落した女性」の両方を不幸に落し入れたことに気付くだけではない。第一次世界大戦という大きな「変化」にもかかわらず、「古い南部」の夢にこだわり続けることは、時代錯誤以外の何物でもないことを悟らざるをえない。ある日、ヴァージニアスは、道で猿を連れたイタリア人のオルガンひきに出会う。その猿は、古い帽子を新しい帽子と取り替えることをかたく拒否し、「遠い昔の騎士道的態度」(p. 292)を持ちつづけているように見えたが、とても悲しそうな表情をしていたと、グラスゴーは書いている。このエピソードは、いつまでも「古い南部」の理想にしがみついている南部人は、悲しく不幸であるばかりか、時代に取り残されてしまっ、猿まわしの猿のように笑われる運命にあることを暗示していると言えるだろう。

ヴァージニアスに「南部女性」や「墮落した女性」の生きざまを眺める「観

察者」の役割を与えることによって、グラスゴーは、「南部神話」を作りだした南部紳士たちの愚かさに目覚める彼の姿を描くことに成功している。しかしながら、「南部神話」という色眼鏡をはずして見た戦後の現実には、ヴァージニアスにとって「残酷さ」(p.74) そのものであり、「あたかも破壊してしまいそうに見える」(p.296) ののである。「現代の生活は、とりわけ、威厳がなく、方向さえないように見えた。当てもなく無限に突っ走っているように見えた」(p.291) と彼は感じる。一見明るく思われるミリーの将来にも、本当の幸せをつかめるかどうかは疑わしいということから、限界が暗示されているように、新しい世代の若者も「過去よりもけっして幸せではない」(p.291) ののである。キャサリン・サンダースはヴァージニアスが「中間の位置に落ちている」と言っているように⁴⁴、彼は、「古い南部」の世界にも戻れず、新しい現実も受け入れられないまま、宙ぶらりんの状態にとどまっている。この小説の季節は冬であり、最後の章の題名は「みせかけの春」となっているが、この設定は、この物語にはついに本当の春は訪れないことを暗示していると思われる。古い過去にも新しい現実にも完全に幸せな世界がないことを知ったヴァージニアスは、本当の春を迎えることができないのである。

こうしたヴァージニアスの本質を見抜いているのは、この物語に登場するもう一人の男性マーマデューク (Marmaduke) であると言えるかもしれない。彼は戦争で片足を失った芸術家であるが、「古い南部」の時代の芸術家と違って、上品に絵を描かず、紫色のヌードを描いている。彼は紫色の影のはいったヴァージニアスの肖像画を描き、美しくないものは真実ではない、とヴィクトリアに非難される。しかし彼は現実を描こうとしたのであって、醜さを描いたのは、それが現実であるからだ、と断言する。彼は続けて、「ほとんどのものは、その皮をむくと美しくはないのだ。・・・我々が信じるように育てられてきた自己満足と物知りぶりから、できるだけ遠く離れようとしてきた」(pp.181-2) と語っている。ヴァージニアスの肖像画を描いたのは、「ヴァージニア紳士

の顔を拭き取ったら、ヴァージニアスがどんなふうに見えるかを確かめようとした」(p. 182) からである。戦争という「変化」を経験した芸術家であるがゆえに、マーマデュークは「古い南部」の再現というヴァージニアスの夢が無価値であることを、見抜くことができたのである。

『彼らは愚行に屈した』という小説は、「南部女性」の神話や「墮落した女性」の神話の崩壊の物語であると同時に、その神話を作りだした南部紳士のもつ価値観の崩壊の物語でもある。ひたすら「変化」を排除して「古い南部」を保とうとしたために、さまざまな神話を作り出すことになった南部人に、グラスゴーは、彼らの試みが不可能であることを警告しているのである。J. H. フランクリンが、「変化の重要性を健康的に理解すること」によってのみ、南部は生き残り、男と女が、黒人と白人が、「よりよい社会を共に求めて生きていく」ことができる、と述べていたように⁸⁾、南部人が目を覚まして「変化」の必然性を認めるようになることを、グラスゴーは訴えているのではないか。グラスゴーは、マーマデュークのような芸術家であるがゆえに、ヴァージニアスの夢の不毛性を語ると同時に、理想主義者南部人に警告を発する、現実にしっかり根をおろした小説を書くことができた。そこに『彼らは愚行に屈した』がグラスゴーの代表作と言われる理由が見い出されるのである。

本稿は日本アメリカ文学会関西支部例会(1990年9月)で、「クィーンパローの女性たち」という題で口頭発表したものに加筆したものである。

註

- (1) *The Romantic Comedians* については、拙論「幻想から現実へ—グラスゴーの『ロマンティックな喜劇役者たち』—」(関西学院大学文学部『人文論究』第35巻第4号, 1986年) *The Sheltered Life* については、拙論『『保護された生活』: エレン・グラスゴーの神話的世界』(関西学院大学文学部『人文論究』第34巻第1号, 1984年)を参照。風俗喜劇としての *They Stoopd to Folly* については、E. E. MacDonald, “Glasgow, Cabell, and Richmond,” in *Ellen Glasgow: Centennial Essays*, ed. M. Thomas Inge (Charlottesville: University Press of Virginia, 1976), Richard

- Chase, *The American Novel and its Tradition* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1957) に詳しい。
- (2) Ellen Glasgow, *A Certain Measure: An Interpretation of Prose Fiction* (1943; rpt. New York: Kraus Reprint Co., 1969), 225.
- (3) Blair Rouse, *Ellen Glasgow* (New York: Twayne Publishers Inc., 1962), 107; Linda Wagner, *Ellen Glasgow: Beyond Convention* (Austin: University of Texas Press, 1982), 84.
- (4) John Hope Franklin, "The Great Confrontation: The South and the Problem of Change," in *Myth and Southern History*, ed. Patrick Gerster and Nicholas Cords, 2vols. (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1989), 2: 102.
- (5) Catherine Clinton, *The Plantation Mistress: Woman's World in the Old South* (New York: Pantheon Books, 1982), 87-9.
- (6) Anne Firor Scott, *The Southern Lady: From Pedestal to Politics 1830-1930* (Chicago: The University of Chicago Press, 1970), 4-13.
- (7) Ellen Glasgow, *They Stooped to Folly* (1929; rpt. Kyoto: Rinsen Book Company, 1974), 208. 以下, *They Stooped to Folly* からの引用は, 該当ページ数のみを記す。
- (8) Barbro Ekman, *The End of a Legend: Ellen Glasgow's History of Southern Women* (Stockholm: Offsetcenter ab Uppsala, 1979), 78.
- (9) Oliver Goldsmith, *The Vicar of Wakefield* の中でてくる次の詩の一節を参照。
 "When lovely woman stoops to folly
 And finds too late that men betray,
 What charm can soothe her melancholy?
 What art can wash her guilt away?"
- (10) Clinton 121.
- (11) Ekman 91. *In This Our Life* については, 拙論「グラスゴーの限界—『この世の中で』をめぐって—」(『関西アメリカ文学』23, 1986年)を参照。
- (12) Franklin 112.
- (13) Rouse 106; Catherine E. Saunders, *Writing the Margins: Edith Wharton, Ellen Glasgow, and the Literary Tradition of the Ruined Woman* (Cambridge: Harvard University Press, 1987), 32.
- (14) Saunders 33.
- (15) Franklin 118.